

# 実践的指導力重視時代の教育実習の現状と課題

—教職志望学生に対する2016年度質問紙調査から—

## Teaching Practice Experience of the Undergraduates Aspirating to Become Teachers in 2016

川村 光\*                      紅林 伸幸\*\*                      長谷川 哲也\*\*\*  
Akira KAWAMURA    Nobuyuki KUREBAYASHI    Tetsuya HASEGAWA

### Abstract

The purpose of this study is to analyze the characteristics of teaching practice in Japan national universities and private universities, comparing the kinds of schools where students did practice teaching using the 2016 and 2017 quantitative investigation data from undergraduates aspiring to become teachers.

From this survey, it was drawn that the qualities of teaching practice experiences were influenced by the school and teacher cultures of the school where students did the teaching practice. Comparing the teaching practice at national and private universities, it can be pointed out that the difference between them is understood as teaching practice at schools attached to national universities and the schools where students graduated from. Also the teaching practices of kindergartens and special support education schools give substantial chances about dealing with pupils' parents and the communication between student teachers and pupils. These findings also showed that teaching practice is an opportunity to experience the school culture and teacher culture.

Teaching practices are the chance for the students to master the culture of school and teacher. It would be related to their experiences in several schools which were not necessarily connected to the positive effects. It is because to encounter the cultures of some schools is to experience the inconsistent cultures rather than to learn the diversities of the schools.

キーワード：教育実習 学部生 教師 質問紙調査

---

\* 関西国際大学教育学部

\*\* 常葉大学大学院初等教育高度実践研究科

\*\*\* 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター

## I はじめに

現在、「国立の教員養成系大学学部の在り方に関する懇談会」による「今後の国立の教員養成系大学学部の在り方について」（2001年11月）の提言を受けて、教員養成系大学・学部を中心に教育実習をコアにした現場体験の学修が増加している。また、中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」(2015年12月)では、教員養成制度改革の目玉の一つとして、教職課程への学校インターンシップの導入があげられおり、科目としての教育実習の一部に学校インターンシップを含めることが可能になる。今後の教員養成は、より一層実習経験に重点を置く実践的指導力を重視する方向にある。

こうした状況において近年の教育実習に関する研究では、1大学における幼稚園教育実習<sup>1)</sup>や小学校教育実習<sup>2)</sup>といったように、限定された大学における特定の学校種の教育実習に焦点をあてた調査研究や、英語<sup>3)</sup>や音楽<sup>4)</sup>などの一教科の教育実習に関する研究が多く、学生が4年間という大学時代全体なかでどのような教育実習を経験してきたのかという点からの研究は十分になされていない。そこで、本論文では、現在、教育実習において教職志望学生がどのような経験をし、何を修得してきたと認識しているのかということ、第一に国立大学と私立大学における実習状況、第二に実習校の数と学校種の差異の観点から明らかにすることを通して、教育実習の現状と課題を捉え、わが国の教員養成制度改革について考察する。

そこで、教職科目を履修している大学4年生(過年度生含む)を対象に質問紙調査を実施し、教育実習の現状について捉えた。質問項目は、実習校の数や校種、教育実習での経験、教育実習で身についたこと、実習経験に関する意識などである<sup>注1)</sup>。

サンプルの選定にあたって、国立大学と私立大学の学生数に偏りができるだけでないように配慮しつつ、個々の大学に依頼をした。また、調査票の配布・回収方法については、各大学の調査実施にあたっての状況が異なっているため、各大学に判断を委ねた。サンプル数は表1の通りである。本調査は、大学生生活上すべての実習が終了している2016年11月～2017年2月という年度後半に実施した。

なお、今後は本内容をふまえて、グローバル化社会を推進するヨーロッパの一国で、2010年代初頭に教育実習改革に着手したイタリアの教育実習システムとの比較考察を行う予定である<sup>注2)</sup>。

表1 サンプル数

国立A大学	263名
国立B大学	77名
国立C大学	27名
私立D大学	87名
私立E大学	103名
私立F大学	90名
私立G大学	20名
私立H大学	14名
合計	681名

## II 教職志望学生の実習校と授業経験

本章では、すべての実習を終了した4年生が実習を行った学校種、学校数、授業経験などの概要について確認する。

4年生のうち8割強が小学校、6割弱が中学校、3割が特別支援学校で実習を行った経験がある(表2)。また、4年間の平均が2.5校、つまり2,3校で彼らは実習を行っている(表3)。授業について確認すると、授業をした総時間数は20.4時間であった。1校あたり、7-10時間程度の授業を行ったことになる。1時間の授業に対する準備時間は145.2分であり、学生は1時間の授

業をするにあたり、倍以上の時間を費やして準備を行っている。また、1日の実習に対する振り返りの時間は84.3分というように、学生は振り返りに1時間以上費やしている。

表4は保育園を除いて、教育実習を行った幼稚園、小学校、中学校、高校、特別支援学校の学校数を総計し、その度数と割合を示したものである。これをみると、実習校数が1校であるのが14.2%、2校が36.5%、3校以上49.3%となっており、本調査で対象とした学生の8割以上が教育実習で複数校を経験していることがわかる。また、表5は教育実習先の内訳を示したものである。本調査で対象とした学生の大多数が教育実習で複数校種を経験していること、特に小学校を経験していることがわかる。

表2 実習校

	経験あり	経験なし	D.K.,N.A
幼稚園	13.5	84.9	1.6
小学校	83.1	15.3	1.6
中学校	59.6	38.8	1.6
高校	9.0	89.4	1.6
特別支援学校	30.1	68.1	1.8
その他	7.0	91.2	1.8

注) 単位は%。

表4 教育実習の実習校数

	度数	%
1校経験者	95	14.2
2校経験者	244	36.5
3校以上経験者	330	49.3
合計	669	100.0

注) 実習校数から保育園は除いた。

表3 実習校数と実習に関する活動時間

Q2A 教育実習校総数	2.5校
Q2D 授業をした総時間数	20.4時間
Q2E 1時間の授業に対する準備時間	145.2分
Q2F 1日の実習に対する振り返り時間	84.3分

注) 教育実習校数は幼稚園、小学校、中学校、高校、特別支援学校の合計の平均値。

表5 教育実習の実習校種

	度数	%
小学校のみ	59	8.9
中学校のみ	49	7.4
高校のみ	23	3.5
幼稚園・小学校	18	2.7
小学校・中学校	246	37.0
中学校・高校	22	3.3
特別支援学校+その他	204	30.7
その他	44	6.6
合計	665	100.0

### Ⅲ 国立大学在籍学生と私立大学在籍学生の比較

大学における教員養成カリキュラムは、開放制のもとで文部科学省による課程認定を受けて質的保証がなされており、養成教育の標準化が進行している。そこで本章では分析的な考察を行うために、教育実習の質の標準化がどの程度進行しているのかということ、師範学校の系譜のある国立大学に在籍し実習をした者（以下、国立学生）と、開放制のもとで私立大学に在籍し実習をした者（以下、私立学生）の経験を比較することを通して検討していく。

#### 1. 実習情報

まず、国立学生と私立学生のサンプルの特徴を捉えるために、彼らがどのような学校に実習に行ったのかということについて確認する。

教職志望学生の実習経験校の割合を示したものが表6になる。国立学生では8割以上が小学校や中学校で実習を行っている一方、幼稚園と高校は1割、特別支援学校は2割と少数しか経験していない。私立学生については、小学校実習経験者は国立学生と同様8割を超えているが、中学

校については4割弱で国立学生より経験者は少ない。一方、幼稚園と特別支援学校は2割強、4割弱というように、国立学生より多くの者が経験している。ここには、今回対象とした大学の特徴が反映していると推察される。高校での実習が少なかったことから、私立大学の中でも初等教育に特化された目的的な教員養成が行われていることがわかる。そうした中で、先の結果が示すように、多くの学生が複数校での実習を行い、4割近い学生が特別支援学校での実習の経験を持っているのだと理解しなくてはならない。

表7は設置者の種類のタイプ分けの割合を示したものである。国立学生のうち、国立学校での実習を経験した者は約75%である（国立学校のみ3割強、公立学校と国立学校の2校種経験者4割強）。それに対し、私立学生の場合は、公立のみという者が7割弱であり、公立学校と私立学校の両方を経験した者を含めた公立学校での実習経験者は9割強となっている。これは、国立大学の実習が基本的に附属学校園で行われているのに対して、私立大学の実習が母校で行われていることによると考えられる。しかし、附属実習が中心の国立大学でも、6割以上が公立学校での実習を経験している。かつて、公立学校を知らないで教師になると問題視された国立大学実習事情は一定程度改善されたと言えるだろう。

表6 実習校（学生別・校種別）

	国立	私立
幼稚園	7.2	< 21.4
小学校	83.4	85.8
中学校	80.1	> 37.9
高校	9.7	8.4
特別支援学校	23.5	< 39.0
その他	3.6	< 11.4

注) 単位は%。カイ二乗検定の結果5%水準で有意差があった箇所には不等号をつけた。

表7 実習校（学生別・設置者の種類のタイプ分け）

	国立	私立
公立のみ	21.1	68.5
私立のみ	1.1	5.5
国立のみ	33.2	0.3
公立+私立	2.2	24.4
公立+国立	41.6	0.6
私立+国立	0.8	0.6
公立+私立+国立	0.0	0.0

注) 単位は%。

表8 実習校数と実習に関する活動時間（学生別）

	国立	私立
Q2A 教育実習校総数	2.7校	> 2.1校
Q2D 授業をした総時間数	19.5時間	21.5時間
Q2E 1時間の授業に対する準備時間	164.7分	> 123.1分
Q2F 1日の実習に対する振り返り時間	96.6分	> 70.0分

注) t検定の結果5%水準で有意差があった箇所には不等号をつけた。また、教育実習校数は幼稚園、小学校、中学校、高校、特別支援学校の合計の平均値。

表9 実習パターン（学生別）

	国立	私立
小学校のみ	6.4	11.7
中学校のみ	7.3	7.5
高校のみ	2.5	4.6
幼稚園・小学校	0.6	5.2
小学校・中学校	48.3	23.8
中学校・高校	5.6	0.7
特別支援学校+その他	23.5	39.1
その他	5.9	7.5

注) 単位は%。

では、複数校実習の実態を、詳細に確認することにしよう。表8に示すよう、実習を行った学校数は国立学生2.7校、私立学生2.1校というように、国立学生の方が校数が多いが、国立学生も私立学生も2校から3校で実習を行う複数校実習が一般的になっていることがわかる。その内訳は、表9に示すように、国立学生のもっとも多いパターンは小・中学校の2校種で、約半数がこのパターンの実習を行っている。続いて多いのが特別支援学校を含むパターンで2割程度がこのかたちで実習を行っている。私立学生でもっとも多いパターンは、特別支援学校を含む実習で約4割、続いて小・中学校の2割強であった。

次に、授業数や指導案作成、リフレクションなどの時間について比較した情報を確認する（表8）。授業をした総時間数は両者ともほぼ20時間と違いはなかったものの、1時間の授業に対する準備時間は国立学生164.7分、私立学生123.1分、1日の振り返り時間は国立学生96.6分、私立学生70.0分というように、国立学生の方が授業時間以外の部分で、多くの時間をかけていることが明らかになった。

## 2. 実習での経験

国立学生と私立学生の実習内容の共通性と差異性について確認する。

表10は実習における活動についての経験者数の割合を示したものである。7割以上の国・私立学生が給食指導、学級活動やホームルーム活動、掲示物入れ替えや戸締りなど教室管理、学校行事の補助の経験をしている。

国立学生の割合が高かった項目としては、清掃指導と、朝の会や終わりの会があげられるものの、それらは私立学生も9割以上の者が経験しており、国・私立学生のほぼ全員が経験する活動と言える。一方、私立学生の割合が高い項目には、職員会議、校内研修、放課後の子どもの勉強会のサポート、子どもの健康診断や健診の補助、クラブ活動や部活動、保護者との交流がある。いずれの項目も約10ポイント以上、私立学生の割合が高く、実習を通して彼らが国立学生より多様な経験をしている様子が窺える。

次に、実習での活動内容を比較した結果が表11である。表中の数値は、「いつもした」3点「しばしばした」2点「あまりしなかった」1点「まったくしなかった」0点としたときの平均値である（以下の表も同様の計算方法で平均値を算出）。「実習校の先生と話をした」国立学生2.83

表10 経験機会のあった活動（学生別）

	国立	私立
Q4 1 清掃指導	98.4	> 95.5
Q4 2 給食指導	90.7	88.5
Q4 3 進路指導	7.6	8.0
Q4 4 職員会議	40.9	< 64.3
Q4 5 校内研修	26.2	< 57.3
Q4 6 放課後の子どもの勉強会のサポート	14.2	< 42.7
Q4 7 子どもの健康診断や検診の補助	28.6	< 36.0
Q4 8 朝の会や終わりの会	97.5	> 94.3
Q4 9 学級活動やホームルーム活動	90.5	86.3
Q4 10 クラブ活動や部活動	66.5	< 75.5
Q4 11 掲示物入れ替えや戸締りなど教室管理	71.1	70.1
Q4 12 学校行事の補助	71.9	72.6
Q4 13 保護者との交流	14.7	< 26.4

注) 単位は%。カイ二乗検定の結果5%水準で有意差があった箇所には不等号をつけた。

表11 実習経験（学生別）

	国立	私立
Q3 A. 実習校の先生と話をした	2.83	2.76
Q3 B. 大学教員と話をした	1.16	< 1.38
Q3 C. 授業をするまえに指導案を書いた	2.77	> 2.61
Q3 D. 研究授業をした	2.56	2.59
Q3 E. 授業時間以外（遊びなどをして）子どもたちとコミュニケーションをとった	2.72	< 2.83
Q3 F. 子どもの保護者と会う機会があった	0.87	< 1.37
Q3 G. 実習の記録を実習日誌に書いた	2.96	2.96
Q3 H. 実習日誌以外のレポートや実習計画などで実践した授業過程を文書化した	1.79	1.88
Q3 I. 職員会議に参加した	1.12	< 1.73
Q3 J. アンケートやインタビューを用いて、または実施して調査・研究をした	0.38	< 0.50
Q3 K. 実習をするにあたって目標や計画を具体的にたてた	2.24	2.27
Q3 L. 担任と同じ役割を担った	1.96	1.89
Q3 M. 子どもの悩みや生活態度に対してアドバイスをしたり、サポートしたりした	1.67	< 1.86

注) 数値は「いつもした」3点「しばしばした」2点「あまりしなかった」1点「まったくしなかった」0点としたときの平均値である。なお、t検定の結果5%水準で有意差があった箇所には不等号をつけた。

ポイント、私立学生2.76ポイントというように、両者とも指導教員と頻りにコミュニケーションをとっていることがわかる。また、「授業をするまえに指導案を書いた」では、国・私立学生とも2.6ポイント以上であり、両者とも指導案をよく書いているが、国立学生2.77ポイント、私立学生2.61ポイントというように国立学生の方がポイントが高い。授業準備時間の長さも考慮すると、国立学生の方が授業の準備に時間をかけていると言える。

一方、国立学生より私立学生の方がポイントが高い活動には、「大学教員と話をした」「授業時間以外は子どもたちとコミュニケーションをとった」「子どもの保護者と会う機会があった」「職員会議に参加した」「アンケートやインタビューを用いて、または実施して調査・研究をした」「子どもの悩みや生活態度に対してアドバイスをしたり、サポートをしたりした」がある。これらの中で特に注目したい点は、「子どもの保護者と会う機会があった」「職員会議に参加した」「子どもの悩みや生活態度に対してアドバイスをしたり、サポートをしたりした」の3つの活動で、国立学生よりも私立学生の方がポイントが高かったことである。授業中心の実習ではなかなか機会が与えられない、これらの活動の機会が、私立大学の实習では与えられているのである。これは、私立大学の实習ではというよりは、公立学校での実習ではと言うべきかもしれない。おそらくは母校実習という親近感から、実習校が多様な活動機会を学生に与えているのだろう。一方国立学校は、その歴史的なレーゾンデールが教科教育にあったことから、授業志向になるべく構造づけられており、国立学校での実習は授業力の高い教師の養成という点で、我が国の学校教育に大きな貢献をしてきた。今回の結果は2つの実習の違いがこのように歴史的、社会的に構造づけられた違いであることを示唆していると言えるだろう。

上述の実習経験に関わって、実習校で教師としての成長に役立つ活動や取り組みに参加する機会があったと回答した学生の割合は、国立学生80.2%、私立学生89.7%であり、私立学生の方が有意義な経験をしたという回答が多かった。主観的な評価なので解釈は慎重に行う必要があるが、どうやら学生たちのニーズは授業以外の活動に向いているのかもしれない。

### 3. 実習の効果

表12は、学生が実習を通して身につけたと思っていることである。

私立学生の平均値が国立学生のそれより有意に高い項目が散見される。保護者に対する対応力、子どもの悩みや生活態度に関するアドバイスをする力、学級経営の力といった教師の力量として必要なものだけでなく、論理的に問題を考える力、問題を解決する能力、出来事や状況

表12 実習を通して身についたこと（学生別）

	国立	私立
Q6 A. 子どもを理解する力	2.08	2.13
Q6 B. 教科の指導力	1.99	1.98
Q6 C. 保護者に対する対応力	0.47	< 0.82
Q6 D. 子どもの悩みや生活態度に関するアドバイスをする力/助ける力	1.48	< 1.68
Q6 E. 学級経営の力	1.36	< 1.51
Q6 F. 教師としての態度や振るまい方	2.15	2.19
Q6 G. 仲間と協力する力	2.19	> 2.06
Q6 H. 授業や学級に関する調査・研究する力	1.77	1.81
Q6 I. 実践を振り返る力	2.11	2.19
Q6 J. 論理的に問題を考える力	1.80	< 1.90
Q6 K. 問題を解決する能力	1.85	< 1.97
Q6 L. ものごとを批判的に捉えられる力	1.60	1.62
Q6 M. 日本社会に対して目を向ける態度	1.25	1.35
Q6 N. 世界に対して目を向ける態度	0.95	< 1.15
Q6 O. 出来事や状況に柔軟に対応できる力	1.94	< 2.05

注) 数値は「十分身についた」3点「ある程度身についた」2点「あまり身につかなかった」1点「まったく身につかなかった」0点としたときの平均値である。なお、t検定の結果5%水準で有意差があった箇所に不等号をつけた。



に柔軟に対応できる力といった汎用的能力を、私立学生は国立学生よりしっかりと身につけたという認識を持っている。彼らは国立学生より保護者との交流や、子どものサポートなどの多様な経験をしばしば行っている。また、彼らの主要な実習先は公立学校であるので、国立学校以上に経済的・文化的に多様な家庭背景を持ち、学力的に幅のある子どもたちに出会い、交流を行っていると考えられる。それらの経験が、実習生の教師としての成長に影響を及ぼしていることが推察される。

表13は実習経験に関する意識についての表である。「大学の授業で学修したことが役に立った」国立学生1.96、私立学生2.18というように、後者のポイントが高い。私立学生は国立学生より大学で実践的な内容を学修している可能性がある。また、大学での学修意欲を高めており、実習はその後の学修に強く影響を与えている。さらに、彼らは教師になる意欲や自信を高めており、実習が教職に就くことを決意する重要な機会になっているようである。加えて、彼らは「授業をもっとたくさんやりたかった」と強く思っている。平均総授業時間数は国立学生と違いはないものの、彼らはさらに実践的な経験を望んでいる。

#### 4. 実習に対する要望

最後に、学生の実習に対する要望について確認する。

表14からわかるように、私立学生が必要性を強く感じている項目が多く、彼らは実習に対する要望が強い。まず、彼らは実習時間・期間の延長を強く望んでいる。私立大学では一般的に1ヶ月程度の実習を集中的に行っているのに対し、国立大学の場合は1ヶ月以上の長期間の実習を設定している場合がある。そういうことが要望の強

表13 実習経験に関する意識（学生別）

	国立	私立
Q9 A. 大学の授業で学修したことが役に立った	1.96	< 2.18
Q9 B. 実習後、大学での学修の意欲が高まった	2.01	< 2.19
Q9 C. 授業をもっとたくさんやりたかった	1.67	< 2.05
Q9 D. 大学で学修する理論について理解が深まった	1.84	1.90
Q9 E. 社会に対する視野が広がった	1.96	2.00
Q9 F. 教育について理解が深まった	2.35	2.44
Q9 G. 教師になる意欲が高まった	2.01	< 2.44
Q9 H. 教師になる自信がついた	1.49	< 1.71
Q9 I. 教育の動向や教育政策への関心が高まった	2.00	2.06

注) 数値は「そう思う」3点「ある程度そう思う」2点「あまりそう思わない」1点「まったくそう思わない」0点としたときの平均値である。なお、t検定の結果5%水準で有意差があった箇所には不等号をつけた。

表14 実習に対する要望（学生別）

	国立	私立
Q10 A. 実習時間の増加	1.68	< 1.84
Q10 B. さらに長期にわたる実習期間	1.52	< 1.75
Q10 C. 指導教員とのコミュニケーションを増やす	2.29	< 2.53
Q10 D. 子どもとのコミュニケーションを増やす	2.48	2.57
Q10 E. 大学教員とのコミュニケーションを増やす	1.78	< 1.94
Q10 F. 保護者とのコミュニケーションを増やす	1.80	< 2.06
Q10 G. 授業時間を増やす	1.75	< 2.00
Q10 H. 実験的な授業を行う機会を増やす	1.99	< 2.17
Q10 I. 大学で学修した知識・技術と実践を関連づけるためのサポート	2.22	2.12
Q10 J. 教授方法と学級運営に関する調査・研究をする機会を増やす	2.07	1.97
Q10 K. 教育体験に対する振り返りの時間を増やす	1.86	< 2.07

注) 数値は「とても必要」3点「ある程度必要」2点「あまり必要ない」1点「まったく必要ない」0点としたときの平均値である。なお、t検定の結果5%水準で有意差があった箇所には不等号をつけた。

さの違いに表れたのかもしれない。

また、彼らは指導教員との交流は国立学生と同様に頻繁に行い、大学教員や保護者との交流は国立学生以上に行っているにも関わらず、指導教員・大学教員・保護者とのコミュニケーションを増やすことも必要性を強く感じている。自らの実習のサポートを充実させるとともに、保護者との交流といったさらなる実習経験を積むことが、実習生にとって必要だという認識を強く持っている。

さらに、実験的な授業を行う機会も強く望んでいる。国立学校は機関の特性上、様々な実験的な教育が行われており、それに関わった授業を行う文化があるため、国立学生が実験的な授業を行える土壌がある。それに対し、公立学校ではすべての子どもに最低限の学力を保証することが求められ、教科書にそった授業が展開されることが多いので、私立学生も同様の授業を基本的に行い、実験的な授業を行いにくい環境にある。そういったことが、彼らの要望の強さの違いに表れたと推察される。

国立学生は国立学校で授業重視の実習を行う。しかも、実験的な試みが可能である。その意味で、これらからの新しい教育を作りだしていこうという意識を持ちつつ、実践を行っていきける可能性を秘めている。しかし、授業中心の実習や実習なれした子どもたちの存在というように、実習経験が限定的であり、彼らのほとんどが勤務する公立学校で必要な力量を十分につけることは難しい。国立大学では公立校実習の機会を与えることでこの問題への対応を進めている。その教育実習改革の方向性は、私立大学の実習に関する今回の結果を見る限り、間違っていないと言ってよいだろう。

私立学生は公立学校で多様な経験をjする。そのなかで、公立学校のリアリティと向き合い、教師の多様な業務を行うための力量を形成していく。しかし、彼らは公立学校で実践されている教育の再生産を行うことが中心となり、今の教育を改善していくという視点が弱くなる可能性がある。

以上のことから、国立学生と私立学生の実習経験は機会という点ではほぼ標準化していると言えるが、国立学校と公立学校、即ち附属学校園と母校である公立学校という実習校の違いによる実習の中身までも標準化されているわけではないと推察される。

#### IV 教育実習校による学生の学びの比較

本調査で対象とした学生は、実に様々な学校で教育実習を行っている。こうした教育実習校の相違は、学生の学びにどのような影響を与えるのだろうか。そこで、本章では、教育実習で経験した学校数と学校種の違いから、学生の学びについて検討する。

##### 1. 実習校数による学びの違い

まず、実習校数によって学生の学びがどのように異なるのかについて確認する。

表15は、実習経験の頻度について、実習校数別（1校経験者、2校経験者、3校以上経験者）に比較したものである。これをみると、活動内容によって結果の傾向が異なっている。例えば、「研究授業をした」では実習校数が多いほどポイントが高いことから、校数が多くなれば経験する頻度が多くなる。また、「実習校の先生と話をした」「授業をするまえに指導案を書いた」「授業時



間以外は（遊びなどをして）子どもたちとコミュニケーションをとった」では複数校経験者が1校経験者に比べてポイントが高いことから、これらの活動内容は1校と2校で差があるものの、それ以上は頻度が高止まりしている。一方、「子どもの保護者と会う機会があった」「職員会議に参加した」「子どもの悩みや生活態度に対してアドバイスをしたり、サポートをしたりした」では3校以上経験者よりも2校経験者の方がポイントが高いことから、保護者と会うことや職員会議に参加すること、子ども

表15 実習経験（実習校数別）

	1校 経験者	2校 経験者	3校以上 経験者
Q3 A. 実習校の先生と話をした	2.64	2.84	2.81
Q3 B. 大学教員と話をした	1.16	1.25	1.28
Q3 C. 授業をするまえに指導案を書いた	2.35	2.75	2.75
Q3 D. 研究授業をした	2.26	2.51	2.71
Q3 E. 授業時間以外は（遊びなどをして）子どもたちとコミュニケーションをとった	2.54	2.78	2.83
Q3 F. 子どもの保護者と会う機会があった	0.95	1.25	1.03
Q3 G. 実習の記録を実習日誌に書いた	2.92	2.96	2.98
Q3 H. 実習日誌以外のレポートや実習計画などで実践した授業過程を文書化した	1.85	1.83	1.81
Q3 I. 職員会議に参加した	1.51	1.63	1.22
Q3 J. アンケートやインタビューを用いて、または実施して調査・研究をした	0.52	0.46	0.39
Q3 K. 実習をするにあたって目標や計画を具体的にたてた	2.09	2.34	2.24
Q3 L. 担任と同じ役割を担った	1.97	1.93	1.93
Q3 M. 子どもの悩みや生活態度に対してアドバイスをしたり、サポートしたりした	1.89	1.83	1.67

注) 数値は「いつもした」3点「しばしばした」2点「あまりしなかった」1点「まったくしなかった」0点としたときの平均値である。なお、5%水準で有意差があった箇所を実線で結んだ。

の悩みに接することは、必ずしも校数が多くなれば経験値が高くなるとはいえない。

表16は、学生が実習を通して身についたと思っていることについて、実習校数別（1校経験者、2校経験者、3校以上経験者）に比較したものである。これをみると、実習校数が増えると身についたポイントが高くなる項目は「仲間と協力する力」だけであり、その他の項目は実習校数と関連がみられない、もしくは実習校数が少ない方がポイントが高くなっている。「子どもの悩みや生活態度に関するアドバイスをする力/助ける力」「学級経営の力」「教師としての態度や振るまい方」「実践を振り返る力」「論理的に問題を考える力」「問題を解決する能力」では3校以上経験者よりも2校経験者の方がポイントが高くなり、実習校数が多ければ多いほどこれらを身につけたという認識が高まるとは限らないのである。

表17は、実習経験に関する意識について、実習校数別（1校経験者、2校経験者、3校以上経験者）に比較したものである。これをみると、実習校数が増えるとポイントが高くなる項目はなく、「大学の授業で学修したことが役に立った」「授業をもっとたくさんやりたかった」「教育について理解が深まった」「教師になる意欲が高まった」では3校以上経験者よりも2校経験者の方がポイントが高い。表16と同様、実習校数が多ければ多いほど教育実習の成果に対する自己意識や

教職意欲が高まるわけではないことがわかる。

以上の結果から、どのようなことがいえるだろうか。まず、実習校数と実習経験の頻度について、基本的には校数が多くなれば経験する頻度が多くなる傾向にあるが、頻度が高止まりすることや、中には校数が増えても頻度が高まらない活動内容もある。次に、実習校数と実習の成果や自己意識について、校数が多いことが必ずしも実習の成果を実感することや教職意欲を高めることにはつながらない。多くの学校を経験することで、逆に学びが拡散したり、経験が多すぎで飽和状態になっ

たりする可能性が指摘できる。学段段階では、経験したそれぞれの学校を相対化して、その違いから学ぶということは難しいのかもしれない。

表16 実習を通して身についたこと（実習校数別）

	1校 経験者	2校 経験者	3校以上 経験者
Q6 A. 子どもを理解する力	2.08	2.14	2.08
Q6 B. 教科の指導力	2.05	2.00	1.95
Q6 C. 保護者に対する対応力	0.55	0.70	0.62
Q6 D. 子どもの悩みや生活態度に関するアドバイスをする力/助ける力	1.67	1.65	1.50
Q6 E. 学級経営の力	1.45	1.51	1.38
Q6 F. 教師としての態度や振るまい方	2.19	2.24	2.11
Q6 G. 仲間と協力する力	1.92	2.16	2.16
Q6 H. 授業や学級に関する調査・研究する力	1.84	1.85	1.74
Q6 I. 実践を振り返る力	2.14	2.24	2.09
Q6 J. 論理的に問題を考える力	1.94	1.91	1.77
Q6 K. 問題を解決する能力	1.89	1.97	1.85
Q6 L. ものごとを批判的に捉えられる力	1.65	1.66	1.56
Q6 M. 日本社会に対して目を向ける態度	1.28	1.32	1.28
Q6 N. 世界に対して目を向ける態度	1.15	1.02	1.03
Q6 O. 出来事や状況に柔軟に対応できる力	2.01	2.05	1.94

注) 数値は「十分身についた」3点「ある程度身についた」2点「あまり身につかなかった」1点「まったく身につかなかった」0点としたときの平均値である。なお、5%水準で有意差があった箇所を実線で結んだ。

## 2. 実習校種による学びの違い

次に、実習校種によって学生の学びがどのように異なるのかについて確認する。

表18は、実習経験の頻度について、8分類の実習パターンで比較したものである。これを見ると、「授業をするまえに指導案を書いた」「研究授業をした」「授業時間以外は（遊びなどをして）子どもたちとコミュニケーションをとった」「子どもの保護者と会う機会があった」などの項目で実習校種による違いが大きい。これらのうち、授業に関しては小学校と中学校が含まれるパターンで、子どもや保護者と関わる機会は「幼・小」や「特+他」でそれぞれポイントが高い一方、「高のみ」は他の実習校種よりもポイントが低い傾向にある。また、他の実習校種に比べて「中の

み」と「中・高」は、「実習の記録を実習日誌に書いた」でポイントが低く、「担任と同じ役割を担った」でポイントが高い傾向にある。すなわち、幼稚園・小学校・特別支援学校では子どもや保護者と関わる機会が多く実習が子ども中心であるのに対して、中学校・高校の実習では授業や担任の役割を担うことが中心であることがわかる。

表19は、学生が実習を通して身につ

たと思っていることについて、8分類の実習パターン別に比較したものである。「教科の指導力」では「高のみ」や「中・高」が高く「特+他」が低い一方、「保護者に対する対応力」では「幼・小」や「特+他」が高く「高のみ」や「小・中」が低い。また、「子どもの悩みや生活態度に関するアドバイスをする力/助ける力」「論理的に問題を考える力」「世界に対して目を向ける態度」では「小・中」に比べて「中のみ」が高い。総じて、表18の違いを反映して、保護者と接する機会がある幼稚園・小学校・特別支援学校では保護者への対応力が、授業中心の中学校や高校では教科の指導力がそれぞれ身についたと認識していることがわかる。ただし、それ以外の項目については、実習を通して身についたと思っていることに実習校種別の違いはみられない。

表20は、実習経験に関する意識について、8分類の実習パターン別に比較したものである。これを見ると、具体的な実習パターン間の差は生じていなかった。すなわち、教育実習を終えた後の学生の認識については、実習パターンによって明確な相違の傾向があるとはいえないだろう。

以上の結果から、どのようなことがいえるだろうか。まず、実習校種と実習経験の頻度について、幼稚園・小学校・特別支援学校では子どもや保護者と関わる機会が多く、中学校・高校の実習では授業や担任の役割を担うことが多いなど、それぞれの学校文化や教師文化の中で重視される中心となる教育活動が実習の経験に影響を与えていることが窺える。次に、実習校種と実習の成果や自己意識について、部分的には、各校種で重視される力と学生が実習の成果を実感する力が結びついているものの、総じていえば、校種の違いが実習の成果にも明確にあらわれているわけではない。上記の実習校数でも確認したように、実習における多様な経験や文化との出会いが必ずしも学生の学びにつながるわけではなく、逆に学びが拡散したり飽和状態になったりする可能性を指摘することができる。

表17 実習経験に関する意識（実習校数別）

	1校 経験者	2校 経験者	3校以上 経験者
Q9 A. 大学の授業で学修したことが役に立った	2.12	2.14	1.98
Q9 B. 実習後、大学での学修の意欲が高まった	1.96	2.17	2.09
Q9 C. 授業をもっとたくさんやりたかった	1.89	2.06	1.68
Q9 D. 大学で学修する理論について理解が深まった	1.87	1.91	1.84
Q9 E. 社会に対する視野が広がった	2.02	1.98	1.95
Q9 F. 教育について理解が深まった	2.41	2.49	2.31
Q9 G. 教師になる意欲が高まった	2.10	2.38	2.11
Q9 H. 教師になる自信がついた	1.55	1.67	1.54
Q9 I. 教育の動向や教育政策への関心が高まった	1.96	2.09	2.00

注) 数値は「そう思う」3点「ある程度そう思う」2点「あまりそう思わない」1点「まったくそう思わない」0点としたときの平均値である。なお、5%水準で有意差があった箇所を実線で結んだ

表18 実習経験（実習パターン別）

	小のみ	中のみ	高のみ	幼・小	小・中	中・高	特+他	その他
Q3 A. 実習校の先生と話をした	2.66	2.69	2.70	2.78	2.85	2.86	2.80	2.84
Q3 B. 大学教員と話をした	1.17	1.16	0.87	1.39	1.21	1.09	1.41	1.27
Q3 C. 授業をするまえに指導案を書いた	2.63	2.38	2.17—2.76	2.76	2.59	2.75	2.77	
Q3 D. 研究授業をした	2.26	2.44	2.26	2.17—2.74	2.67	2.62—2.23		
Q3 E. 授業時間以外は（遊びなどをして）子どもたちとコミュニケーションをとった	2.98—2.62—1.83—3.00	2.79—2.14—2.89	2.76					2.76
Q3 F. 子どもの保護者と会う機会があった	1.22	0.88—0.52	1.78—0.87	0.59—1.43	1.32			
Q3 G. 実習の記録を実習日誌に書いた	2.98	2.88	2.96	2.94	2.98—2.82—2.98	2.95		
Q3 H. 実習日誌以外のレポートや実習計画などで実践した授業過程を文書化した	2.00	1.79	1.65	2.06	1.76	1.64	1.85	1.86
Q3 I. 職員会議に参加した	1.37	1.50	2.00	1.50	1.34	1.68	1.40	1.30
Q3 J. アンケートやインタビューを用いて、または実施して調査・研究をした	0.47	0.60	0.57	0.67	0.40	0.82	0.33	0.48
Q3 K. 実習をするにあたって目標や計画を具体的にたてた	2.22	2.23	2.13	2.39	2.31	2.27	2.19	2.25
Q3 L. 担任と同じ役割を担った	1.71—2.16	2.17	2.00	1.91—2.45—1.88	1.86			
Q3 M. 子どもの悩みや生活態度に対してアドバイスをしたり、サポートしたりした	1.83	1.92	1.87	2.00	1.72	1.77	1.75	1.55

注) 数値は「いつもした」3点「しばしばした」2点「あまりしなかった」1点「まったくしなかった」0点としたときの平均値である。なお、5%水準で有意差があった箇所を実線で結んだ。

表19 実習を通して身についたこと（実習パターン別）

	小のみ	中のみ	高のみ	幼・小	小・中	中・高	特+他	その他
Q6 A. 子どもを理解する力	2.08	2.06	2.04	2.17	2.10	2.14	2.11	2.11
Q6 B. 教科の指導力	1.92	2.10	2.22	1.94	2.00	2.23	1.91	2.00
Q6 C. 保護者に対する対応力	0.71	0.69	0.13	1.17	0.47	0.68	0.74	0.84
Q6 D. 子どもの悩みや生活態度に関するアドバイスをする力/助ける力	1.64	1.78	1.57	1.83	1.46	1.77	1.61	1.59
Q6 E. 学級経営の力	1.41	1.47	1.57	1.39	1.42	1.59	1.44	1.45
Q6 F. 教師としての態度や振るまい方	2.34	2.21	2.13	2.11	2.16	2.23	2.13	2.11
Q6 G. 仲間と協力する力	1.95	2.14	1.78	2.06	2.12	2.18	2.19	2.27
Q6 H. 授業や学級に関する調査・研究する力	1.98	1.90	1.73	1.78	1.75	1.91	1.73	1.91
Q6 I. 実践を振り返る力	2.17	2.16	2.17	2.11	2.13	2.36	2.14	2.16
Q6 J. 論理的に問題を考える力	1.85	2.08	1.96	1.78	1.78	2.05	1.83	1.86
Q6 K. 問題を解決する能力	1.86	2.06	1.78	1.94	1.85	2.09	1.91	1.95
Q6 L. ものごとを批判的に捉えられる力	1.73	1.73	1.57	1.44	1.58	2.00	1.55	1.61
Q6 M. 日本社会に対して目を向ける態度	1.32	1.49	0.91	1.56	1.23	1.50	1.32	1.33
Q6 N. 世界に対して目を向ける態度	1.14	1.31	0.83	1.17	0.91	1.18	1.08	1.18
Q6 O. 出来事や状況に柔軟に対応できる力	1.93	2.14	1.87	2.11	1.95	2.10	2.01	2.02

注) 数値は「十分身についた」3点「ある程度身についた」2点「あまり身につかなかった」1点「まったく身につかなかった」0点としたときの平均値である。なお、5%水準で有意差があった箇所を実線で結んだ。



表20 実習経験に関する意識（実習パターン別）

	小のみ	中のみ	高のみ	幼・小	小・中	中・高	特+他	その他
Q9 A. 大学の授業で学修したことが役に立った	2.10	2.25	1.95	2.28	1.93	2.41	2.12	2.02
Q9 B. 実習後、大学での学修の意欲が高まった	1.98	2.21	1.77	2.00	2.04	2.14	2.24	2.00
Q9 C. 授業をもっとたくさんやりたかった	1.75	2.19	1.64	1.94	1.77	2.14	1.90	1.72
Q9 D. 大学で学修する理論について理解が深まった	1.86	2.08	1.77	2.06	1.74	2.14	1.93	1.88
Q9 E. 社会に対する視野が広がった	2.12	2.10	1.73	2.17	1.88	2.00	2.03	1.91
Q9 F. 教育について理解が深まった	2.53	2.50	2.23	2.44	2.33	2.50	2.44	2.26
Q9 G. 教師になる意欲が高まった	2.03	2.44	1.82	2.56	2.12	2.32	2.33	2.09
Q9 H. 教師になる自信がついた	1.49	1.81	1.27	1.78	1.56	1.73	1.61	1.53
Q9 I. 教育の動向や教育政策への関心が高まった	2.08	2.13	1.68	2.06	2.02	2.36	2.00	2.00

注) 数値は「そう思う」3点「ある程度そう思う」2点「あまりそう思わない」1点「まったくそう思わない」0点としたときの平均値である。なお、5%水準で有意差があった箇所を実線で結んだ。

## V おわりに

本論文では、国立大学と私立大学の実習の違いと実習校種の違いという2つの観点から、現在の我が国の教育実習の特徴を捉えようと試みてきた。

2つの分析結果に共通することは、実習の質は実習校の学校文化・教師文化で決まっているという点である。国立大学と私立大学の実習の比較では、両者の違いが附属学校での実習と母校での実習として理解されるものであることを指摘した。一方実習校種による比較では、特別支援学校や幼稚園の実習が、子どもとのコミュニケーションや保護者対応などに関して比較的充実した機会を提供していることなどを指摘した。これらは、学生たちが教育実習においてそれぞれの学校種の特徴が反映した経験を積んでいることを示している。教育実習は、学生が学校文化や教師文化を体験し、身体化する機会なのである。

おそらく、多くの実習校を経験することが、必ずしもプラスの効果につながらないことは、このことに関わっているものと思われる。複数の学校の文化に触れることは、多様性を学ぶことよりも、矛盾する文化を体験することになるからである。指導案の作成に力を入れる小・中学校と指導案を作成しない高校、授業づくりに力を入れる附属学校と、生徒指導に力を注がなければならない公立学校、こうした異なる文化の経験をしっかり統合させるリフレクション等の機会を用意し、その支援ができる指導体制を整えることが重要となるだろう。

この教育実習が学校文化・教師文化を身体化する機会であるという観点は、もう一つ重要な論点を提起する。それは附属学校が我が国の教師文化の再生産に果たしてきた役割、世界No.1の教育を作り上げた優れた教師たちを育ててきたということである。附属学校での実習が中心であったことは、教科の授業を中心とし、授業づくりや授業の準備に力を注ぐ教師文化を身体化した教師を養成していたとすることができるかもしれない。しかし、教科書がワークブック化され、授

業の雛形が用意され、授業の準備に時間をかけなくてもよい教育に変わりつつある現在、教師に求められる力の中心は、授業を構想し、つくる力ではなく、既成の授業案に沿って授業を進めていくために、教室の子どもたちに臨機応変に対応し、子どもたちをコントロールする力なのかもしれない。その力は、これまでの実習の中心であった附属スタイルの実習よりも、公立学校、特に多様な体験と責任の伴う体験を積み上げることができる母校での実習を通じて効率的に身につけていくものなのかもしれない。しかし、このことは、附属学校実習の終焉を意味するものではない。

日本の教育実習は、授業力が未熟な自分を身体化する機会である。日本の教師の自信のなさは、長く国際比較調査で指摘されてきた。しかし、この自信の無さは、決してマイナスなものではなく、日本の教師の向上心や勤勉さを支えてきたものなのである。指導案通りに進めることができない未熟さ、指導案に縛られて子どもの発想を生かせない未熟さ、指導案を書かされて、書き直させられ、やってみて、思い通りにできない経験。指導案は実習生にとって自信をなくす通過儀礼なのである。こうした経験が弱まったときに、教師はどうなるのか、そして教育はどうなるのか。教育実習改革は、日本の教師を変え、日本の教育を変えてしまうかもしれない、大事業なのである。

#### 【注】

注1 教育実習での経験、教育実習で身についたこと、実習経験に関する意識などの質問項目については4件法を採用した。

注2 日本とイタリアの教育実習システムの比較研究に関連した研究成果として次のものがある。

Akira KAWAMURA, Silvana MOSCA, Elisa CORINO, Miranda MOSCA “Japanese-Italian Comparative Study on Teacher Training (I): Teaching practice system in Japan from the Perspective of Italian Researchers”『関西国際大学教育総合研究叢書』第10号, 165-175頁, 2017

#### 【引用文献】

- 1) 鈴木隆「幼稚園教育実習のあり方について－実習調査から読み取る実習の実態－」『立教女学院短期大学紀要』第48号, 69-80頁, 2017  
蜂谷幸子, 大野雄子, 吉村真理子, 藪田喜子, 田中幸「幼稚園における観察・参加実習の学びと気づきについて」『千葉敬愛短期大学紀要』第39号, 193-203頁, 2017
- 2) 末次有加, 紅林伸幸「教育参加カリキュラムの効果に関する実態調査(1)－滋賀大学教育学部学生に対する2012年度質問紙調査から－」『滋賀大学教育学部紀要(教育科学)』第63号, 125-137頁, 2013  
———, ———「教育参加カリキュラムの効果に関する実態研究(2)－附属実習と地域実習の比較から－」『滋賀大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第22巻, 55-62頁, 2014  
田中るみこ, 石田康弘, 橋本義徳, 野上俊一, 岡田充弘, 平田繁「小学校教育実習生の実態調査について－小学校教諭を目指す本学学生の実習前後の変化－」『中村学園大学発達支援センター研究紀要』第7号, 25-30頁, 2016
- 3) 土持かおり「中学校英語授業における実習生の実態と課題－実習生の学習指導案と意識調査をもとに－」『鹿児島県立短期大学紀要(人文・社会科学篇)』第64号, 59-68頁, 2013
- 4) 宮本憲二「中等科音楽における教育実習の現況と課題－教育実習“振り返りシート”の考察を通して－」『尚美学園大学芸術情報研究』第22号, 1-27頁, 2013

【参考文献】

- ・川村光「教育実習における社会的オジの役割－メンター制度への注目－」『滋賀大学教育学部教育実践総合センター紀要』第16巻, 91－98頁, 2008
- ・———「改革期にあるイタリアの小・中学校教員養成」『関西国際大学教育総合研究所研究叢書』第8号, 1－13頁, 2015
- ・紅林伸幸, 川村光「教育実習への縦断的アプローチ－大学生の教職志望と教師化に関する調査研究(2)－」『滋賀大学教育学部紀要(Ⅰ:教育科学)』第51号, 271－282頁, 2002
- ・———, ———「グローバル化と高度化の中の教員養成改革－イタリアの取り組み－」『滋賀大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第22巻, 71－77頁, 2014

[付記] 本研究は、平成25－28年度科学研究費補助金(基盤研究(C))「グローバル化下の教育実習を中核とした教員養成制度改革の日伊比較研究」(課題番号25381282 研究代表者:川村光)の交付を受けた。